

むかしの荒川の水害と、くらしを守る人々の知恵

堤防で囲まれた人の住むところ

江戸時代の、荒川の河道のつけかえは、江戸城のあった下流部を、洪水のひ害から守ることが目的の一つでした。

洪水でこわいのは、ぼう大な水の量と流れのいきおいです。河道が変えられた荒川では、洪水が出たとき、一気に海へむかわずに、広い中流部で、一

度水がためられ、いきおいを弱めて下流へ流れるようになりました。

そのため、洪水のため池となった中流部の村には、村をぐるりと囲む、大囲堤が作られました。

江戸時代のおもな洪水災害

3900人もの死者を出した寛保2年(1742)の洪水

この年の洪水は、利根川の洪水もあわせ、武蔵の国(埼玉県・東京都) 一帯が水びたしになりました。



赤線のあたりまで水があふれました(長瀨町)



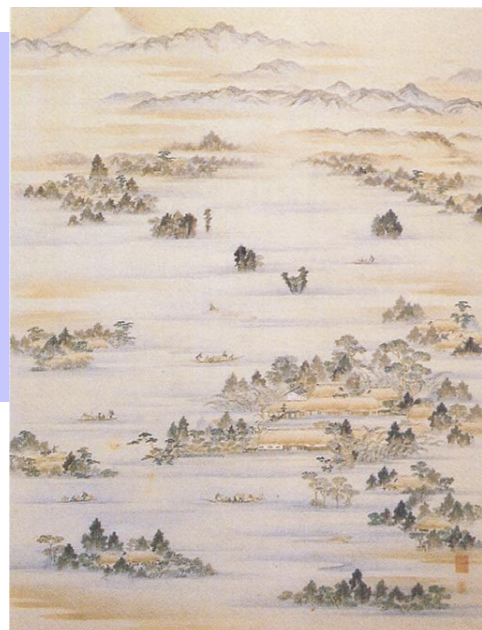
がけにきざまれた洪水の水位(長瀨町)

異常な水位となった安政6年(1859)の洪水

寛保2年の洪水につぐ、大洪水で、寄居町から入間川が合流するあたりまで、水びたしになりました。



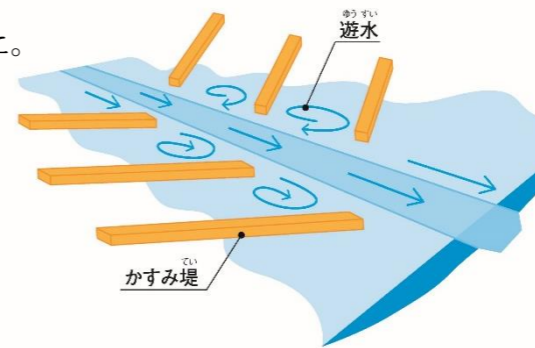
安政6年(1859)の洪水位をしるした岩(皆野町)
画像提供: 埼玉県立川の博物館



安政6年出水の図(坂戸市)
画像提供: 林茂美氏

むかしの堤防 かすみ堤

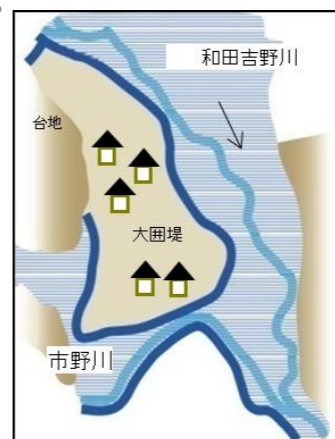
川の流れに対して、ななめにつくられた堤防です。洪水を堤防と堤防のあいだに少しずつ受けとめ、下流ではんらんを起こすのを防ぎました。



改修以前にあった越辺川のかすみ堤(坂戸市、鳩山町)

大囲堤

村をぐるりと囲んだ堤防で、洪水から村を守りました。



平成19年、豪雨による洪水で大囲堤付近まで水がきました



大囲堤(吉見町)

川の豆知識

水塚・むかしの人の洪水対策

洪水がよく出る地域では、いつも住んでいる家より一だん高いところに水塚(ひ難用の家)が建てられました。



今も残る水塚(川島町)